

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった。(ヨハネ 1:1~5)

教会が「正典・カノン」と定めた新約聖書には四つの福音書がある。最初の三つ、マタイ、マルコ、ルカは「共観福音書」と呼ばれ、ヨハネによる福音書は「ヨハネ福音書」、または、四番目の福音書だから「第四福音書」と言われている。福音書は全て、ナザレのイエスをキリストと信じる著者たちがキリストを弁証しようと「キリスト告白」として書いている。共観福音書は、イエスの公生涯の言動と十字架と復活の出来事を人間の側から「共通して」観る視点で書かれている。ヨハネ福音書は、公生涯の言動を踏まえつつも、復活し昇天した栄光のキリストが語る、言わば、上から人間に語りかける手法で書かれている。ヨハネ福音書が書かれたのは、紀元90年代と言われている。ローマ帝国内にキリスト教がかなり広まり、神学的にも整えられてきた。その神学を背景に、格調高くキリストの福音を著している。著者が誰であるか分からないが、ヨハネ教団の中の人であろう。ゼベダイの子ヨハネを著者にしたいような書き方も見られるが、事実ではあり得ない。ヨハネ福音書は、神と共にあった先在のキリストが肉を取って現れ、神の愛を示されたというテーマで一貫している。「この世」という言葉がしばしば出てくる。この世は神に敵対するものであるが、神はその「この世」を愛し貫かれ、キリストの十字架によって、救いを実現されたと告知している。ヘレニズム的表現が多く見られるので、読者は異邦人キリスト者が予想され、彼らの理解を得ようとしたのではないかと考えられていた。現在の聖書学では、当時、キリスト者はユダヤ教の会堂（シナゴグ）から異端として排斥されていたので、ユダヤ人に対してキリスト教理解を促すために、また、ユダヤ人キリスト者にキリスト信仰の確かさを得させようとする意図で書かれたと受け止められている。

ヨハネ福音書は、上記、冒頭の1節~5節までに、福音の核心が書かれている。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」「初めに言があった」という記述は多くの人に感動を与えた。殊に、言葉の力が失せた時、人間は言葉で立つのだと勇気を与えられてきた。「言」はギリシア語で「ロゴス」で、「言葉」、「知恵」を意味する。著者は、このロゴスをキリストと捉え、ロゴス・キリストは世の初めから存在し、神と共にあった、神ご自身であると説く。著者の「キリスト告白」である。そして、「万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった」と、キリストによる創造を説く。旧約聖書の創世記の初めに天地創造物語が書かれ、神が「光あれ」と宣言すると、光があったと神の言葉による創造を告げている。著者は、天地創造物語と類比する形で、ヨハネ福音書の冒頭でロゴス・キリストによる新しい天地創造を指示している。更に、「言の内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった」と説く。ロゴス・キリストが内包するものは「命」であった。キリストを信じ、神と結びつく永遠の命が与えられる。そして、この命が人の光であった。どう生きたらよいか分からない時、光として道筋を示してくださる。この世は「闇」であるが、光は闇の中で輝き、闇に打ち勝ち、勝利を約束する。